

日本国際経済学会 第70回全国大会  
@ 慶応大学三田校舎

# リカードとJ.S.ミルのあいだ 二大価値論の転換点

中央大学商学部  
塩沢由典

# 手違いのお詫び

## ● 発表原稿

- 70回大会WEBプログラムの「要旨」>>本原稿
- 70回大会WEBの「論文」>>別に用意したもの
  - ◆「二大価値論の分岐点」(刊行予定の本の第1章)

## ● WEBの「論文」: 大会終了後に閉鎖してもらいます。

## ● 論文請求等は

[shiozawa@tamacc.chuo-u.ac.jp](mailto:shiozawa@tamacc.chuo-u.ac.jp)

まで

# 話の前提(確認の意味で) 1

---

## ● 貿易論(国際貿易を含む価値論)

- HOSの理論      2国2財2要素
- Ricardoの理論      2国2財1要素

## ● 仮定

- HOS      技術は一定、賦存要素の比率
- Ricardo      技術がことなる、要素は労働のみ

## ● 一般理論

- HOS      Arrow-Debreuの特殊設定
- Ricardo      McKenzie(1954a, b, 1955) Jones(1961)

# 話の前提2 リカード貿易理論その後

## ● McKenzie, Jonesの残した課題

- ◆ 投入財が貿易される経済
- ◆ 対称な場合(各国が同じ投入係数行列をもつ)のみ

## ● ネオ・リカーディアン(Steedmanなど)

- ◆ 利子率の変化に応ずる価格変化
- ◆ 小国の仮定に限定された。

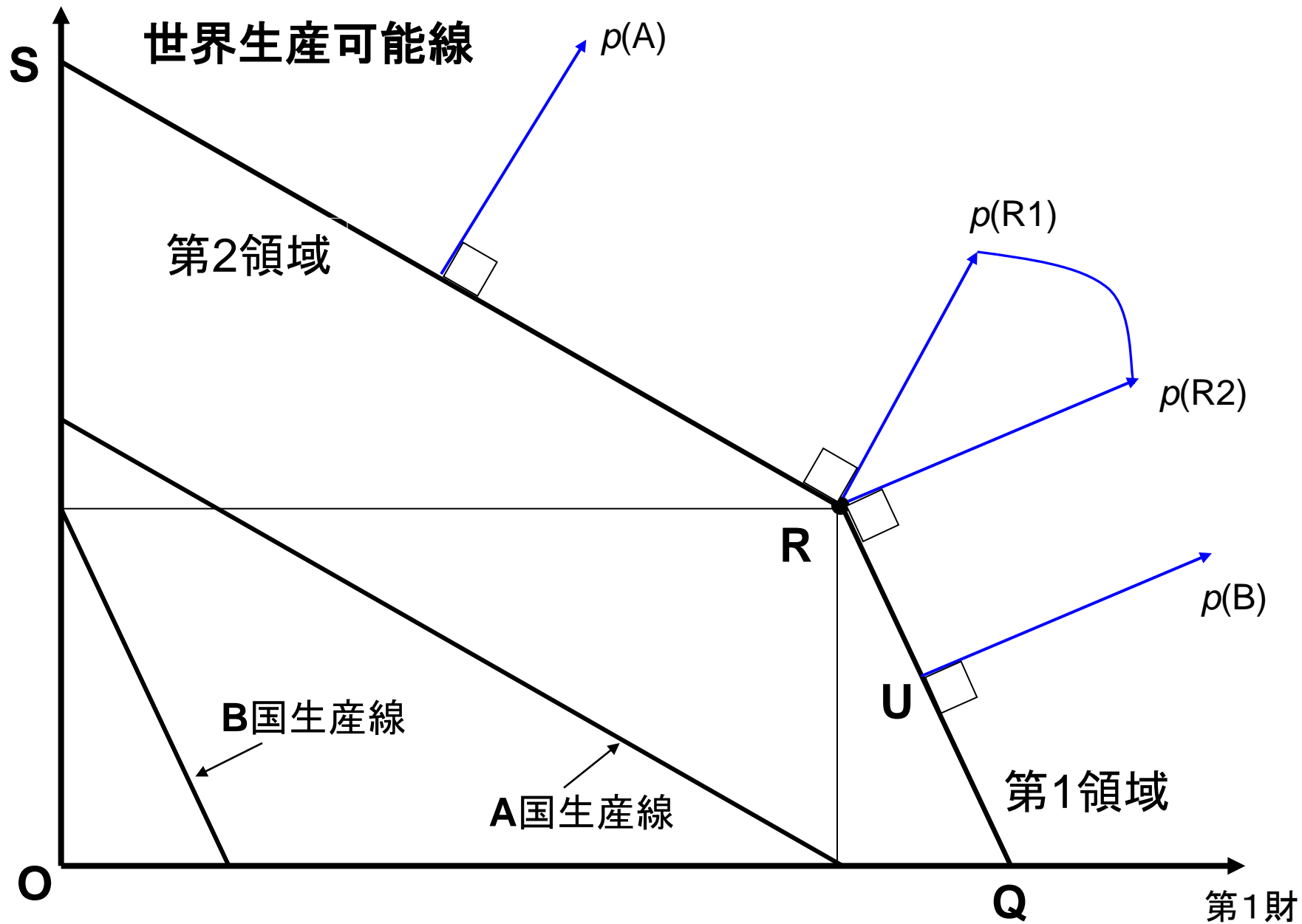
## ● 塩沢由典(2007) リカード貿易理論の新構成(経済学雑誌, EIER)

- ◆ リカード・スラッファ型、M国N財、上乘せ率一定を前提
- ◆ 投入財の貿易、技術選択、地下資源などは技術の差と表現

# 古典派国際価値論の成立

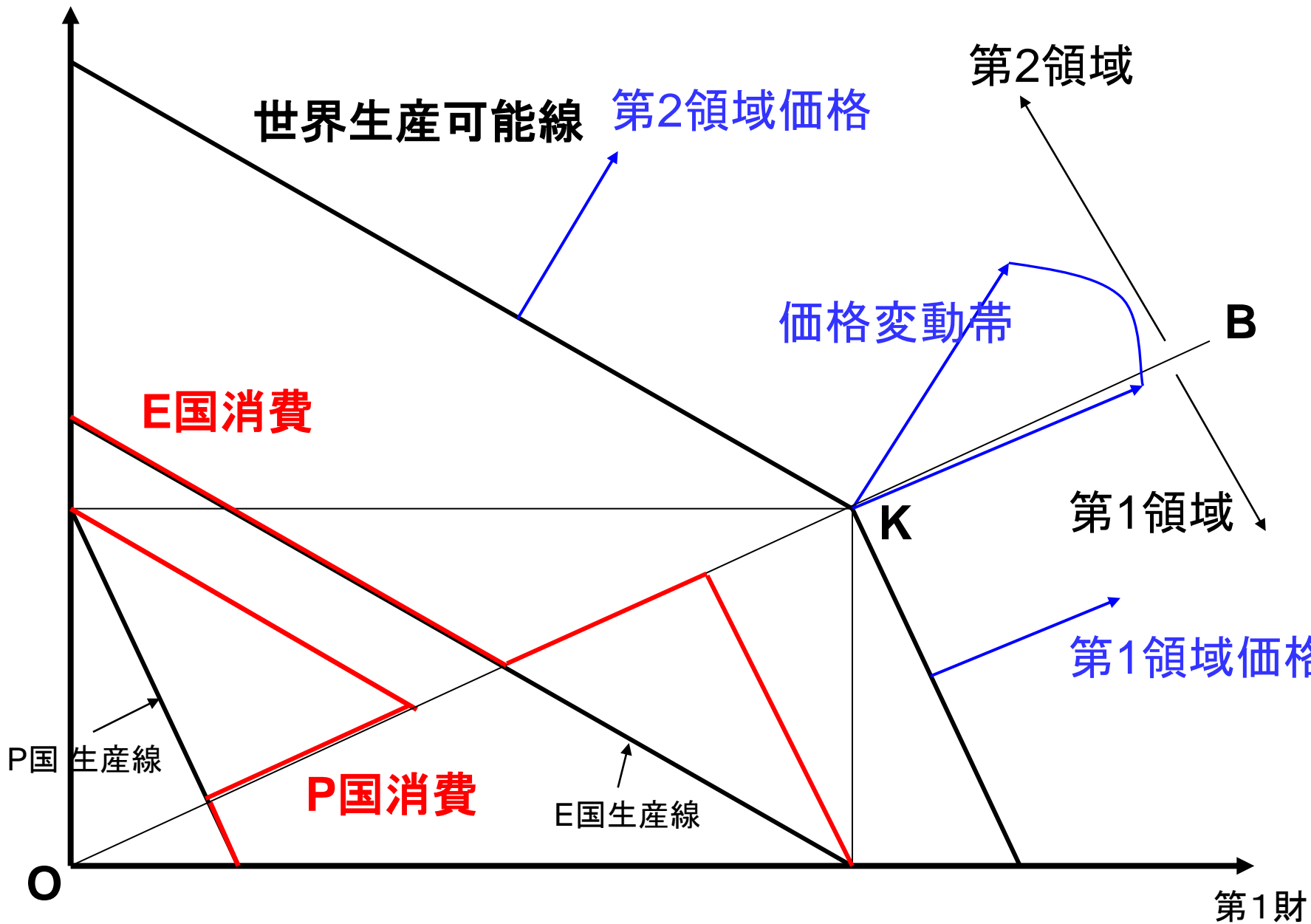
- リカード・スラッファ経済
- 世界需要が正則な領域
  - 賃金率( $w_1, w_2, \dots, w_M$ )と財の価格( $p_1, p_2, \dots, p_N$ )が一義的に定まる。
  - 各国はこの価値体系 $w, p$ において
    - ◆ 競争的産業のみで完全雇用が可能
    - ◆ 価値と数量の分離>不完全雇用状態の分析も可能
- リカード問題<sup>(1816)</sup>、マルクス問題<sup>(1867)</sup>が基本的に解決。 マルクスの場合、生産価格論として。

第2財



第1財

第2財



世界生産可能線 第2領域価格

第2領域

価格変動帯

E国消費

B

第1領域

K

第1領域価格

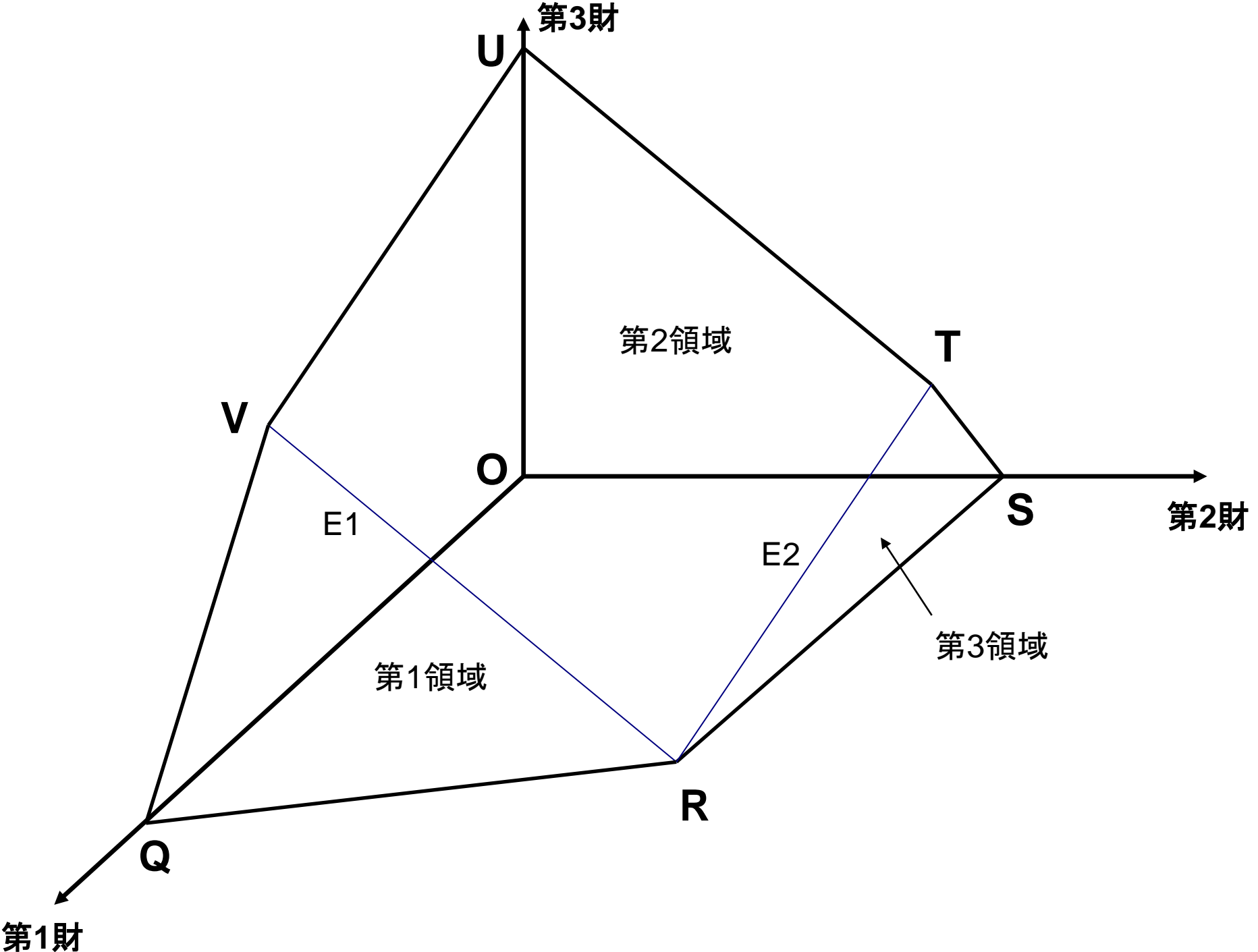
P国生産線

P国消費

E国生産線

O

第1財





# 古典派国際価値論の意義

---

## ● HOS理論と対比して

- 要素価格均等化定理(Samuelson)
- 最初は、奇妙な定理として
- 世界における大きな賃金率格差

## ● 古典派国際価値論

- 技術の違いが $w=(w_1, w_2, \dots, w_M)$ を決める。
- 各国の賃金率の違いが理論内部の論理として説明できる。

# 発表の本論

---

## ●2大価値論とは

- 古典派(リカード)の価値論
- 新古典派の価値論

## ●特徴

	J.R.Hicks	井上義朗(2004)
--	-----------	------------

■古典派	Plutology	「産業型」経済
------	-----------	---------

■新古典派	Catallactics	「商業型」経済
-------	--------------	---------

## ●なぜ？

# 転換点は？

---

## ● J.S. ミルの国際価値論

- 1844 *Essays on Some Unsettled Questions*
- 第一論文(1/5) Of the Laws of Interchange between Nations
- 相互需要説

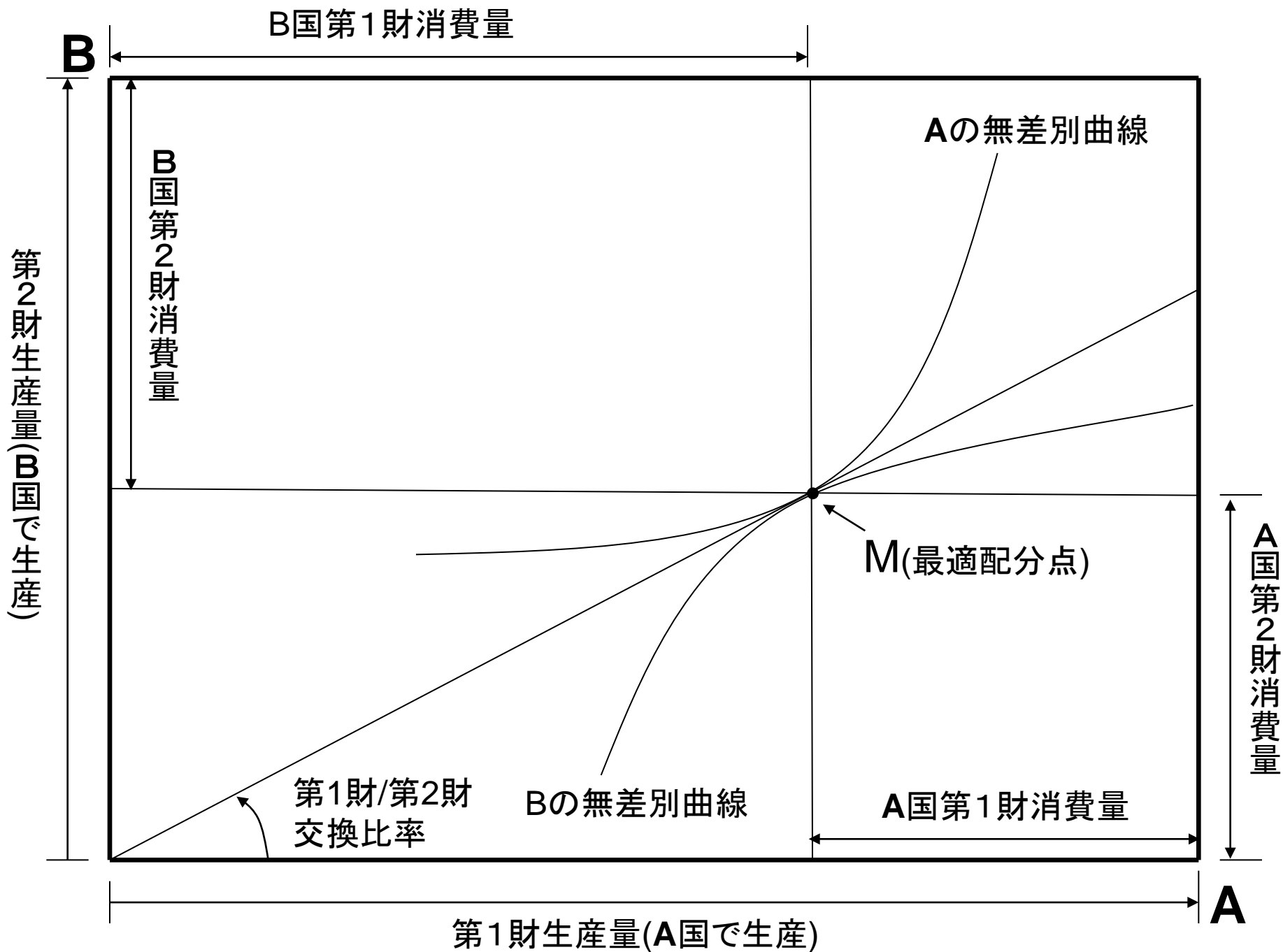
## ● 2国2財、生産量は確定

- その上で合意できる交換比率を求める。
- 純粹交換経済
- こういう設定は、M国M財の場合のみ
  - ◆ なぜ貿易論は、M国M財のみを分析してきたか。

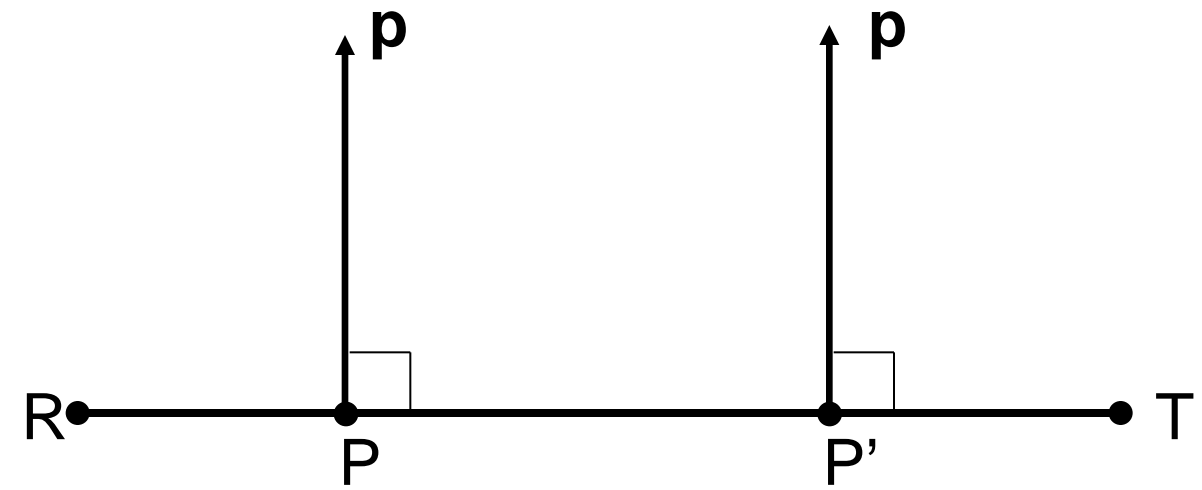
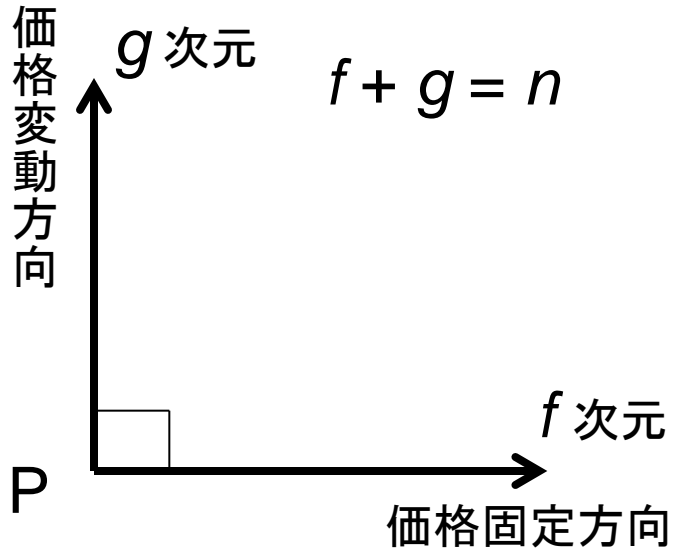
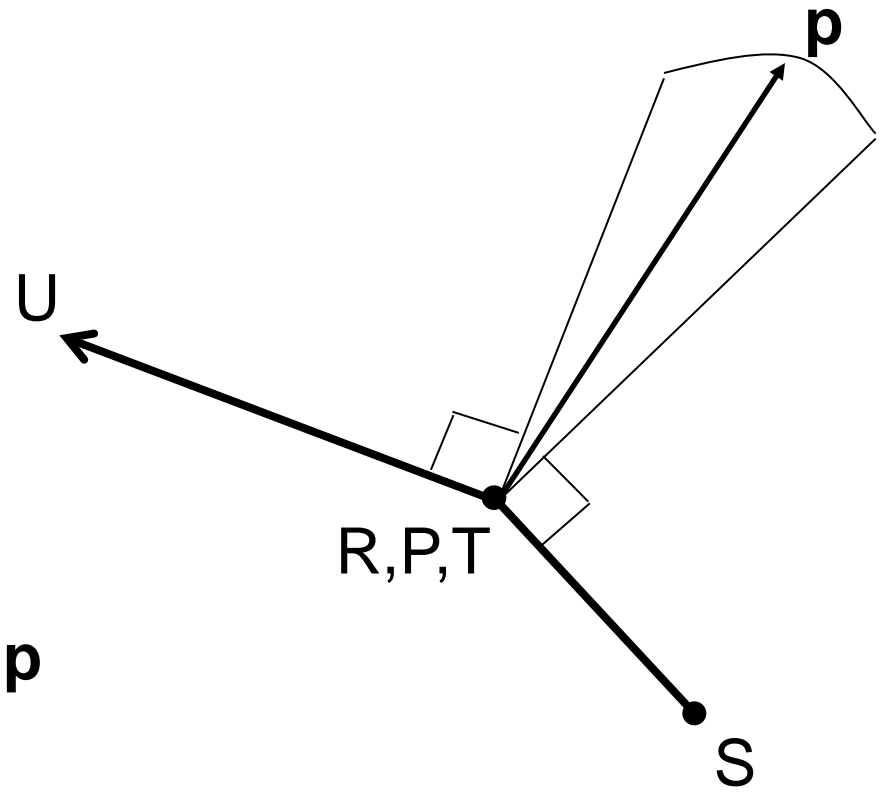
# 純粋交換経済の展開

---

- マーシャル(1879) *The Pure Theory of Foreign Trade*
  - ミルの問題に取り組む
- エッジワースのボックス・ダイアグラム
  - 次図参照
  - 『数理精神学』 ロビンソンとファラデー、財と労働
  - Morgan(2004) マーシャル(1879)の影響では？
- W.S. ジェボンズ(1871) 第4章「交換の理論」
  - 2者2商品、なぜ「交換団体」なのか
  - 交換団体： 例にイギリスと北アメリカ



価格変動・数量固定方向



価格固定・数量変動方向

# 結論

---

## ●リカードの未解決問題

- J.S.ミルの解決の試み
- >> 純粹交換經濟
- >> 新古典派 (Jevons, Marshall, Edgeworth)

## ●古典派価値論

- 弱い環 国際価値論の欠如
- リカード・スラッフア型の価値論が復活
- 「ケインズに戻れ」にも関係 (12月3日上智大学)